

Title	昭和初期の学生と音楽趣味
Author(s)	加藤, 善子
Citation	大阪大学教育学年報. 1 P.117-P.128
Issue Date	1996-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/7989
DOI	10.18910/7989
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

昭和初期の学生と音楽趣味

加藤 善子

【要旨】

本稿は、文部省『学生生徒生活調査』(昭和13年)を手掛かりに、当時の学生の音楽趣味がどのようなものであったかを考察するものである。音楽は、昭和初期学生の多くが挙げる趣味であった。明治以来、音楽は文学などと同様、旧制高校をはじめ学生文化の中には成立しなかった趣味であったが、昭和初期に増加したのである。明治後期から昭和にかけて、学生の社会的構成の変化から新中間層出身の学生が増加したことや、学生数の増加や寄宿制度の廃止などにもなう学生文化の多様化がその一因であった。学生の出身階層や出身家庭の経済状態との関連をみると、スポーツは旧中間層出身の学生と、音楽と読書は新中間層出身で家庭が裕福な学生とそれぞれ関連が強く、スポーツと音楽の間に映画と美術鑑賞が位置する。また、多くの学生は、楽器などを積極的に演奏することはなく、レコードやラジオから流れてくる音で音楽を楽しんでいたことが、当時の資料や記録から推測される。音楽は都市新中間層出身の学生に結びついた、バンカラ主義とも教養主義とも異なるところで発生した新しい趣味だったと考えられるのである。

0. はじめに

ここで中心に考察するのは、昭和初期の音楽愛好の中心であったと考えられる高等教育機関在学者の音楽趣味についてである。当時行われた学生生活調査によると、音楽は学生が最も多く挙げる趣味のひとつになっている。蓄音機やラジオが普及し、音楽を耳にする機会が増えてきた時代ではあったが、その一方で、農村や漁村では音楽がまだ娯楽としては愛好されていなかった⁽¹⁾。しかし、ラジオの普及率に地方差がありながら学生の音楽趣味が全国的に高かったこと、25才未満の年齢層がラジオの洋楽放送を支持していたことなどから、どの地方でも学生の一定割合が西洋音楽を愛好していたと推察される。音楽は大正から昭和初期にかけ、他の西洋文化とともに普及し始めていたが、短期間で学生の間にも普及したのである。

これまで、旧制高校をはじめとした学生文化については寮生活とスポーツ、あるいは教養主義を中心に研究されることが多く⁽²⁾、それ以外の学生文化についてはあまり深くは調べられてこなかった。本稿では音楽に焦点をあて、当時の学生文化のなかで音楽が普及した背景、ドミナントな趣味であったスポーツや読書に対する音楽の位置、そして音楽の愛好のされかたについて、当時の学生調査などを手掛かりに考察してみようと思う。

1. 西洋音楽趣味の普及

レコードやラジオが存在せず、また存在しても殆んど普及していない昭和以前の日本において、音楽を愛好するには実際の音を聞くことが不可欠であるが、実際の音を聞く機会は限られていた。西洋音楽に興味を持つか否かはともかくとして、西洋音楽を知ることが出来たのはわずか

の人々であり、それは高等教育に関連する人々か外国生活経験者くらいであった。しかし、そのような人達を中心に、音楽を求める層は確実に存在していた。西洋の小説や文献から知識として音楽を知り、音を聞く以前に活字の彼方に西洋音楽が想像されていたという指摘もある（笠間1990、70頁）。

西洋音楽の愛好者について、不特定多数の愛好者が成立するのは昭和に入ってから数年後、レコードの普及によってである。演奏会の方は、それまでも開かれてはいたが、昭和2年に新交響楽団（現在のNHK交響楽団）の定期演奏会開始後、定期的に開かれるようになっていく。しかしコンサートの開催数は増えず、レコードの売上が伸びていき、レコードを中心に音楽を愛好するスタイルが広まっていった。演奏会に足を運ぶ聴衆と、レコードを中心に音楽を聴く愛好者が分かれていったのだが、こうした動きの中でレコード中心の愛好者が増加していったのである⁽³⁾。

また、昭和初期は流行歌が成立した時期としても重要である。昭和4年「東京行進曲」や「君恋し」などのレコードはそれぞれ20万枚以上のセールスを記録し、映画音楽と共に広く口ずさまれる曲が次々と生まれた。流行歌などの国内レコードは一枚一円程度で、決して安くはないが手軽に購入できるものであり（倉田1992）、レコードがこれだけの売上げを記録したことは、蓄音機もまた普及していたことを示している。

レコード中心の鑑賞スタイルが成立した時期は、同時に音楽が学生の趣味として最もポピュラーなものの一つになった時期に重なるが、おそらくその担い手に学生が一定の割合を占めていたと思われる。演奏会に通うにはかなりの金額が必要で⁽⁴⁾、地方の学生は演奏会に通うこともできなかった⁽⁵⁾。レコードならば貸借りが可能であるし、何度も繰返して聴ける。昭和初期の学生の生活費は自宅生で約35円、下宿生で約60円で、演奏会に通い続けたり何枚もレコードが買ったとは考えられない。では、どのような学生がどのように音楽を聴いていたのか、つぎにこれをみてみることにしよう。

2. 学生の趣味と音楽

2-1. 学生の社会的構成の変化と学生文化の変化

昭和初期に注目するのは、一般にこの時期に学生の社会的構成が変化すると指摘されており、その変化が学生の趣味の変化と関係しているのではないかと思われるからである。高等教育機関に在籍する学生の出身階層は、1920年代では農業・工業・商業従事者を中心とする旧中間層が主であったが、1930年代には都市ホワイトカラーを中心とする新中間層が旧中間層に量的に拮抗するようになり、1935年以降には新中間層が急激に増加していったとされる（天野1989、325頁、伊藤1993、172頁）。昭和初期は、明治以降の学校教育を受けたホワイトカラーの両親をもち、都市で生活してきた若者が、高等教育機関に在籍するようになった時期なのである。

明治以来、旧制高校をはじめとした学生の間でのドミナントな趣味はスポーツであった。皆寄宿制のもとバンカラ文化が支配し、文学や音楽などの文化的趣味は「軟弱」として受け入れられなかった。それが多様化し始めるのが明治後期からである。明治中期から後期にかけて、都市ホワイトカラーを職業とする新中間層が形成されつつあり、その出身の学生が高等教育機関に少数ではあるが入学してくるようになる。一部のバンカラではない学生が、ドミナントな文化である

スポーツ文化の外で、多様な趣味や文化に関心を向けた。弁論部、文芸部に続かなかちで、音楽団体も各高校・大学でつくられはじめる。大正7年の大学令以後の学生数の増加も手伝って学生文化は様々なバリエーションを呈するようになるが(二見1974)、大正時代を通じて大学・専門学校・高校に文芸部・弁論部などが全国的に設けられ、校風の「軟化」と文芸的関心の多様化にともない、音楽団体も次々と設立されていった(Roden1980,高橋1992他)。第一次大戦後は、音楽団体がつくられるとともに、学生が作曲していた寮歌のメロディーもやわらかなものに変化し、校風や運動競技での武勇などはうたわれなくなるなど(Roden1980, 218頁)、音楽はそれ自身で学生に受け入れられるようになっていった。このように、音楽趣味も学生文化の変化以前には受け入れられなかった訳だが、音楽は実際の「音」を伴うため、特に皆寄宿制度の下では成立しえない趣味でもあった。皆寄宿制度の廃止により、自宅や都市など学校の外から「音」が学生の中にも持込まれたと考えられる。

2-2. 学生の趣味

ここで、文部省が昭和13年に全国の高等教育機関に対して実施した『学生生徒生活調査』を手がかりに、どのような学生が音楽を愛好していたのか調べてみたいと思う。『学生生徒生活調査』では、高等教育機関を、大学(帝国大学7校・官公立大学14校・私立大学4校)、高等学校(官公私立高等学校28校)、大学予科(帝大・官公立大学予科4校・私立大学予科5校)、高等師範学校(2校)、女子高等師範学校(2校)、女子専門学校(8校)、各種専門学校(官公立医学・薬学専門学校8校・官立外国語専門学校2校・官公立美術・音楽専門学校3校・官立高等工業専門学校19校・官立高等農業専門学校15校・官立高等商業学校15校・高等商船・水産専門学校4校・私立専門学校

表1 学生の主な趣味(%)

	映画	読書	音楽	スポーツ 各種	絵画・ 美術鑑賞	写真	観劇・ 芸術鑑賞	レコード	洋楽
帝大	47.42	20.86	29.24	15.80	15.80	13.20	15.80	2.35	0.52
官公立大	26.54	18.48	23.92	17.87	17.87	12.54	17.87	1.4	0.57
私立大	33.17	27.31	27.11	23.34	23.34	11.72	23.34	0.79	0.50
高校	34.32	31.67	26.78	21.73	21.73	11.96	21.73	1.22	0.21
予科(官)	32.04	48.52	39.59	15.95	15.95	12.61	15.95	1.15	0.00
予科(私)	40.34	34.61	31.59	22.13	22.13	14.79	22.13	0.5	0.30
高師	29.43	23.57	24.75	23.17	23.17	7.37	23.17	0.79	0.72
女高師	12.85	48.58	41.16	20.87	20.87	2.95	20.87	0.94	0.94
女専門	29.40	52.62	32.59	14.29	14.29	2.79	14.29	0	3.27
医薬	34.98	25.10	25.62	21.15	21.15	15.46	21.15	0.99	0.17
外語	36.62	33.02	30.50	14.13	14.13	6.05	14.13	1.22	0.27
高工	38.45	27.55	25.87	24.06	24.06	14.98	24.06	0.94	0.63
高農	34.63	29.45	26.52	21.11	21.11	15.64	21.11	0.39	0.00
高商	36.96	31.15	29.05	24.39	24.39	9.11	24.39	1.15	0.89
船水	32.49	27.89	21.63	29.97	29.97	9.99	29.97	1.91	0.35
私立専門	33.40	43.40	36.60	22.80	22.80	7.20	22.80	0	0.00
美音	41.28	31.24	2.72	8.54	8.54	6.38	8.54	3.19	0.00

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

表2 学生の出身階層、うち学費支給が容易である家庭出身の学生(%)

	新中間層	旧中間層	医・宗	その他	無職	支給容易
帝大	32.01	27.66	9.49	1.93	19.43	29.53
官公立大	24.44	34.36	16.51	3.91	18.39	40.61
私立大	24.53	24.83	20.26	6.85	18.47	44.79
高校	38.94	25.60	11.24	4.56	16.33	48.37
予科(官)	36.25	31.18	10.17	5.68	13.85	45.51
予科(私)	30.68	27.16	18.21	7.24	14.08	50.50
高師	33.25	43.91	2.70	4.87	13.10	20.80
高師女	43.40	26.18	6.60	4.95	18.40	36.44
女専門	34.83	28.41	14.21	4.53	15.98	45.85
医薬(官)	25.28	46.43	10.34	5.06	11.39	34.69
外語(官)	32.88	40.15	4.35	5.30	16.17	38.93
高工(官)	35.75	42.18	2.24	3.80	14.04	33.17
高農(官)	29.42	54.55	2.41	2.64	9.97	38.20
高商(官)	32.42	47.99	1.69	3.05	13.42	49.12
高船水(官)	32.75	42.92	3.21	6.43	13.03	42.40
専門(私)	34.40	36.60	4.80	4.60	16.80	55.6
美音(官)	31.14	28.89	6.66	11.63	20.36	33.58

新中間層……銀行員・会社員・官公吏・教師

旧中間層……農業・工業・商業

医・宗……医者・宗教家

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

表3 学生の自家の所在並びに居住形態(%)

	自家 都市所在	自家 農村所在	自家通学	寄宿舍
帝大	73.54	26.46	34.84	0.68
官公立大	69.18	30.82	35.98	3.63
私立大	75.17	24.83	44.39	2.58
高校	79.54	20.46	32.17	33.20
予科(官庁)	80.47	19.53	42.02	19.91
予科(私)	76.16	23.84	49.09	1.61
高師	53.52	46.48	9.48	42.00
女高師	74.06	25.94	11.79	85.61
女専門	74.22	25.78	49.23	38.65
医薬(官)	69.67	30.33	26.50	0.00
外語(官)	66.30	33.70	40.35	5.23
高工(官)	67.23	32.77	29.34	14.15
高農(官)	43.15	56.85	13.42	34.81
高商(官)	71.58	28.42	34.81	17.75
高船水(官)	60.64	39.36	10.86	82.19
専門(私)	81.40	18.60	51.20	7.80
美音(官)	83.49	16.51	46.06	5.82

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

表4 趣味と属性との相関係数(美・音大除く)

	映画	読書	音楽	スポーツ	絵画 美術鑑賞
新中間層	-0.3507	0.6264	0.5824	-0.0338	0.2213
旧中間層	0.1493	-0.3410	-0.4389	0.3297	-0.3247
支給容易	0.0313	0.4749	0.3358	0.0755	-0.4756
自家都市	0.0099	0.4307	0.5448	-0.2356	0.0342
自宅通学	0.3589	0.3095	0.3377	-0.4449	-0.0108
寄宿舍	-0.6442	0.3360	0.1063	0.3674	0.1670

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

校1校)に分類し、各校種ごとに学生の出身地、自家の職業、当時の生活状態などが細かく調査されている。学生の趣味も調査されているが、学校種ごとに集計がまとめられているので、ここでは学校種の単位で趣味の割合を比較してみたいと思う。

学生の主な趣味をまとめ、一覧にしたものが表1である。音楽趣味は、映画、読書に続き、各学校種で2割～4割の学生が挙げている(美術・音楽専門学校は一つの学校種としてまとめられているが、音楽が音楽学校での研究内容であるためか、音楽を趣味としてあげる学生が極端に少ない。他の学校の学生の考える「音楽」とは意味が異なると思われる、学生全体の傾向を見るには不適當と考えられるので、以下の分析からは除外した)。高等農業学校や高等学校などは、その多くの学校が演奏会会場の無い都市以外に所在するにもかかわらず4人に1人以上が音楽を趣味としている。また、どの学校種でも音楽を愛好する学生が2割以上存在することは、音楽趣味がそこのカリキュラム内容に直接影響されることはなかったことを意味すると思われる。

最低2割の学生が音楽を愛好していたことは、生活する地域や学校種に関係なく音楽が普及していたことを示しているが、それでは2割から4割の広がりの違いは何に原因が求められるのだろうか。音楽がバンカラではない学生の持ち込んだ趣味とするならば、バンカラでない学生の割合の違いが音楽を愛好する学生の割合の違いと対応すると予想される。そこで、学校種ごとの音楽愛好者の割合と自家の職業別の割合を比較してみた。各学校種での出身階層別学生の割合は表2にまとめ、自家の所在が都市か農村か、ならびに学生の居住形態(自宅通学と寄宿舎のみを掲載)は表3にまとめてある。ここでの出身階層は学生の自家の職業を分類したもので、農業・工業・商業の自営業主層を「旧中間層」、銀行会社員・官公吏・教師の俸給生活者を「新中間層」と分類している⁶⁾。それをもとにして、音楽を趣味とする学生の割合と、新中間層出身の学生、旧中間層出身の学生の割合、家庭からの学費支給が容易である学生の割合、自家が都市所在(都市出身)である学生の割合、自宅通学である学生の割合、寄宿舎で生活する学生の割合との相関の強さをそれぞれ求めた。また他の趣味と音楽趣味を比較するために、映画、読書、スポーツ、絵画・美術鑑賞などを愛好する学生の割合とも相関を求め、列記してある(表4)。

その結果、音楽を趣味とする学生の割合は、新中間層出身の学生、都市出身の学生の割合が増えるほど増加し(それぞれ $r=0.58, r=0.54$)、旧中間層出身の学生の割合が増えると音楽趣味はどちらかという減る($r=-0.44$)、という傾向が見られた。一方スポーツは、新中間層出身の学生の割合とは関連がないが、旧中間層出身の学生の割合と弱い相関がある($r=0.33$)。音楽は都市新中間層出身の学生が愛好し、スポーツは旧中間層の学生が中心に愛好しており、このことは、学生の間で音楽趣味とスポーツ趣味がいくらか離れて存在していたことを示しているのではないだろうか。

また、読書と出身階層との関連は音楽とほぼ同様の関係にある。絵画・美術鑑賞も出身階層との関連がやや小さくはなるが、同様の傾向にある。反対に映画は、新中間層出身の学生、および寄宿舎で生活する学生の割合とは負の関連があり、それ以外は関連が薄くなっている。

経済的な要因によっても趣味は左右されているようだ。文部省は学費の支給の難易度を容易・可能・困難の三段階で調査しているが、これは学生の出身家庭の経済状態を示していると考えられる。自家の学費支給が容易であると回答した学生の割合との関連を見ると、正の関連の最も強いものは読書であり、音楽がそれに続く。出身家庭の生活の程度とあまり関連しないのはスポー

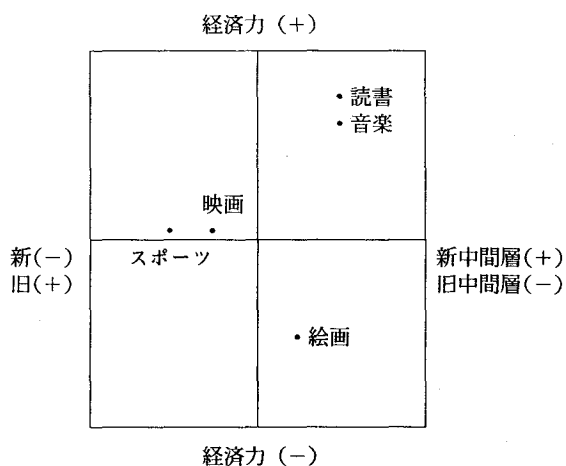


図1 学生の出身階層・経済状態と趣味の類型

スポーツ、映画、絵画・美術鑑賞、読書、音楽、を配置することができる。それぞれの趣味を愛好する学生が同程度の割合で存在はしていても、それぞれの趣味を共有する学生は、その出身家庭の中に同じ文化的背景を共有しており、それが何種類かの傾向に分かれているのである。

2-3. 「音楽」の内容

音楽と他の趣味との関係を概観したところで、音楽に話を戻そう。音楽は、都市新中間層出身の、経済的に生活が容易である学生が趣味にする傾向があるわけだが、実際にどのように愛好されていたのだろうか。邦楽か洋楽か、そして演奏会・演奏活動・音楽雑誌・レコードについて、個別に見ていこうと思う。

まず、学生の愛好する「音楽」は洋楽か邦楽かという問題だが、昭和初期における「音楽」は西洋的な音楽を意味すると考えてよいと思われる。文部省『学生生徒の娯楽に関する調査』（昭和9年）は学生の校友会の調査であるが、そこでの分類のされ方をみると「音楽」という分類のほかに、「謡曲」「尺八」「邦楽」という項目がある。西洋的な音楽と日本古来の音楽とが区別され、西洋的な音楽は「音楽」という言葉で表されるようになったと考えられる。従って、学生が挙げる「音楽」も、おそらく西洋的な音楽を意味していると考えてよいだろう。

表5 学生の音楽団体

設立年度	団体数
T15以前設立	27
T15以降設立	22
学校創立がT15以前	12
T15以降	2
不明	8
不明	13
合計	63

「音楽年鑑」各年度より作成。

ツと映画であり、負の関連のあるのは絵画・美術鑑賞となっている。音楽を聴くには、たとえ安価な流行歌であっても蓄音機やラジオの受信機などの機器が必要であるし、レコードを買うとなるとさらに費用が必要になることが、経済状態と結びつく一因だろう。また、「音」を聴くためには近所迷惑にならない環境も必要であるため、自宅通学者との関連があるのではないだろうか。

学生の出身階層や経済状態と趣味との対応を把握するため、学生の出身階層を一つの軸におき、自家の経済状態をもう一つの軸にとると、図1のように、スポー

では、学生の音楽団体について少々触れておきたい。学生の音楽団体は戦前、全国で63団体つくられた（『音楽年鑑』、その他資料）ことを確認できるが、学生の音楽団体は大半が明治・大正に成立しており、学生の音楽愛好が増加した昭和以降にはそれほど増えていない（表5）。団員数などが不明なので団体内でメンバーが増えているのかもしれないが、おそらく管弦楽が演奏できるような大規模団体ではなく、ごく小規模な団体であったと考えられる。プロ

表6 「平素愛読せる雑誌」(音楽関係)

	帝大	官公立大	私立大	高校	予科(官)	予科(私)	高師	女高師	女専門
「レコード音楽」	0	0	0	21	3	3	0	0	0
「音楽世界」	0	0	0	0	3	0	0	0	0
「音楽評論」	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他の音楽雑誌	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	0	0	0	21	6	3	0	0	0

	医業(官)	外語(官)	高工(官)	高農(官)	高商(官)	高船水(官)	専門(私)	美音(官)
「レコード音楽」	0	0	0	0	0	0	0	0
「音楽世界」	0	0	4	1	2	0	0	16
「音楽評論」	0	0	1	0	0	0	0	19
その他の音楽雑誌	2	0	0	0	0	0	0	16
合計	2	0	5	1	2	0	0	51

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

グラムを見ても少人数で演奏できる小品が主で⁽⁷⁾、昭和に入っても学生だけでは一つのオーケストラを構成することはできなかったようだ。昭和3年から6年、昭和8年から、朝比奈隆は京都帝国大学のオーケストラに所属していたが、そこでは「非常に学生数が少なくて、卒業生とか町の音楽家の応援を得ないととてもできない」と彼は回想している(朝比奈1985,36頁)。従って学生の音楽団体の成立は、学生の趣味の変化を表すものの一つではあったが、それが昭和初期に増加した学生の音楽趣味とは直接つながらなかったといえる。

次に、学生が音楽を知る手段について考えたい。学生は音楽に関する情報をどのようにして得ていたのだろうか。学生調査から知ることの出来る範囲では、雑誌やレコードなどの音楽関係の情報に求められていた形跡は意外なほど少ない。文部省『学生生徒生活調査』(昭和13年)によると、「レコード」や「洋楽」など「音楽」に関連するカテゴリーを挙げる学生は、「音楽」がこれだけの割合を占めるにもかかわらず極端に少なくなる(表1)。音楽関係の雑誌も、愛読する雑誌としてはほとんど挙げられていない(表6)。美大・音大生が読む以外は高校と大学予科で僅かに読まれる程度で、大学や専門学校では読まれていない。それに比べ、『文藝春秋』などの文芸雑誌は多くの学校での読書調査において上位を占めており⁽⁸⁾、読書趣味の多さと対応していると言えるだろう。読書に関しては多くの読書調査が実施されていることもあり、その内容をある程度知ることができる。それに対し「レコード」は、趣味として挙げる者もほとんどおらず、各学校種で2%以下でほとんど開きがない。「レコード」趣味には、レコードの蒐集という限定的な意味もあったかもしれないが、それにしても「音楽」趣味の割合との格差が大きすぎるように思われる。学生の多くは音楽を聴かたわら、雑誌を読んだりレコードを探したわけではないことを、この調査結果は示しているように思われる。

このように、調査報告書からでは学生が聴いていた「音楽」の中身は、洋楽であったらしいこと以外殆ど判らない。これまでの旧制高等学校研究などでは音楽や映画趣味に関しては殆んど触れられていない上、回想録にも音楽を趣味とする学生を描写したものは少なく、後に音楽家になった学生や、特に音楽にのめり込んだ学生のみが音楽について書き残している程度である。これだ

け多くの学生が音楽を趣味にしていたにもかかわらず、全くと言っていいほど音楽について語られることがないのには、音楽愛好者の音楽の聴きかたが関係しているのではないだろうか。

学生が実際どのように音楽を聴いていたか、その一端を知るために、文部省の調査が実施された時期に学生時代を過ぎた音楽愛好者の記録を二件引用したいと思う。昭和10年頃に大学時代を過ぎた哲学者の安藤孝行氏(1911年生まれ)の音楽の聴きかたはそのことを表しているように思われる。安藤氏は1933年(昭和8年)八高を卒業し、京大哲学科に進学した。下宿はせず、愛知の実家を人に貸し、京都に借家をして家族で生活していた。自宅によくレコードを聴いたらしく、大学での友人竹内義範氏にレコードを貸している。「安藤は、『電蓄』でクラシックのとくにバッハ、ベートーヴェン、シューベルトを大きな音量でよくかけ、竹内には古い電蓄とモーツァルトのレコードを、きくやうにといつて貸した。何度もきいて飽きたら一、二枚自分で買って、また飽きたら売って新しいのを買へばいい、本でも読んで不要になったら売って別な本を買えばいいんだ。安藤はさういつてゐた。『君は音楽はわからないから、電蓄とレコードは返したまへ』安藤は一、二ヶ月すると、貸したものを竹内からとり返してしまつた」(白崎1987,72頁)。昭和10年代に甲南高等学校で学んでいた生物学者の岡田節人氏(1927年生まれ)も、14、5才の頃兄が両親にねだつた蓄音機とレコードを自宅で聴いており、ある友人の兄弟が1920年代に買ったと思われるマーラーのレコードを譲り受けたりして音楽に親しんでいた(岡田1991,134,142~3頁)。甲南高校に進学した岡田氏には、この学校の「スポーツ万能の学風は何とも耐え難いものであった」。「つまり、スポーツの選手であることだけが、この学校では天下公認の英雄的な存在である。文芸だとか学術とかはまったく何の価値もなく、私には大いに違和感があった。どこかの運動部へ入って、スポーツに精を出すなどは、私にとっては身の毛もよだつほど嫌なことだった。(中略)だから、他の少年たちがスポーツに精を出している時間は、ぼんやりと小説でも読んでいるか、ようやく心を惹かれ始めた音楽を聞いているか」(岡田1991,106頁)であったと書いている。

ここに挙げた2人はレコードで音楽を聴いていたが、その聴き方に注目したい。特に岡田氏の記述からは、スポーツ文化になじめない違和感から音楽を一人で聴いていたような印象を受ける。しかし、文部省の調査では音楽を趣味に挙げる高校生は3割以上おり(私立も官立もまとめられている)、岡田氏が7年間過ぎた甲南高等学校も文部省の調査対象に入っているので、甲南高校でも何割かの愛好者が存在していたはずだが、そのような友人がいたという記述はない。一方安藤氏も、友人にレコードを貸すが、その友人と音楽の話をするわけでなく、自分の趣味を友人に押しつけることもない。安藤氏に至っては一組のレコードを繰り返し聴き、飽きたら売るという徹底ぶりである。二人とも音楽に対してそれほどのめり込んでいるわけではなく冷めているように感じられるが、それは彼らの音楽生活の豊かさがちがうのだと思われる。それは、明治時代から音楽愛好者であった野村胡堂が、演奏会を聴きに行くために病気をかえりみずに出かけたり、遠方での演奏会に行けなかったことですすり泣いたりしたような音楽的環境の貧しさと音楽への情熱に比較すれば一目瞭然である⁽⁹⁾。このように、彼らは音楽にのめりこんだりサークルを作って積極的に活動したわけではない。音楽愛好者はばらばらで存在しており、それぞれが個人的に音楽を鑑賞していたと考えられる。

音楽の聴き方についてはこれ以上のことはわからないが、音楽を愛好する学生には豊かな愛好者とそうでない者が存在したと推察される。ここに挙げた2人は当時でも少数の音楽愛好者の中

心的存在であったと思われ、大多数の愛好者とは少々性質が異なるのではないだろうか。安藤氏は愛知の代々庄屋の家に、岡田氏は伊丹の造酒屋に生まれた旧中間層出身者である。二人とも裕福な家庭に生まれて都市で生活し、当時でも貴重品であったクラシック音楽のレコードを聴いていた。彼らは経済的な豊かさという点で音楽に最も近かったのである。この時期に前後して、何人かのレコード愛好者の回想録も残っているが、評論家の小林秀雄やフランス文学者の中島健蔵、作曲家になった柴田南雄らがあり、彼らはレコードに金をつぎ込んで音楽を聴いていた、豊かな愛好者であった。しかし、彼らの様にレコードや演奏会に使う経済力のある愛好者は少数しかいなかったはずである。そのような中心的な愛好者の周りに、ラジオやカフェでクラシック音楽の断片や流行歌を聴く、回想録には登場しない愛好者が存在していたのではないだろうか。経済的に裕福な学生は、音楽に興味を持たずすぐに近づくことができたし、そのような学生は明治期からの少数の愛好者と同様、おそらく出身階層を問わず存在していたと考えるのが自然である。そして学生の2割以上を占めていた、おそらくはそれほど経済的に豊かではないが音楽を愛好する学生が、都市新中間層出身の学生に多かったのではないだろうか。

昭和初期の学生音楽愛好者の増加は、この周辺部の拡大であったと考えられる。レコードを買い演奏会に通う愛好者はそれ以前から確かに存在していたからである。新中間層が台頭し、彼らがつくった都市生活のなかで育った若者が、少数の裕福な愛好者の周りで、自ら楽器を演奏するだけでなく、熱心に音楽学を勉強するわけではなく、流れてくる音を聴いて音楽を楽しむというスタイルをとりはじめた。パンカラではない学生が学生全体に占める割合が昭和初期に大きくなったのであり、都市文化が成立し始めた時期の、都市の生活から身に付いた愛好スタイルが学生のあいだで広まったのである。

3. 都市の若者の趣味

音楽は、都市中間層出身で経済的に裕福な学生と結びついたスマートな趣味だったと考えられるわけだが、学内で奨励された文化的に「正統」な趣味だったのだろうか。それには教養主義との関連を考慮しなければならない。特にクラシック音楽は西洋の文学作品を通して知識として知られていった面が考えられ、「準教養主義」に含まれるとされるロマン・ロラン（筒井1995,62頁）やニーチェなどの著作によって、ベートーヴェンやワーグナーの人格が神格化されるまでになったことがあるかもしれないからである。そこで、ロマン・ロランのベートーヴェン像の影響がどれほどのものであったのかを同調査から集計してみたが、各学校でベートーヴェンを「尊敬私淑する人物」として挙げた学生はわずか1%かそれ未満のところが多い（表7）。また、音楽それ自

表7 「尊敬私淑する人物」にベートーヴェンを挙げた学生数とその割合

	帝大	官公立大	私立大	高校	予科(官)	予科(私)	高師	女高師	女専門
人 (%)	73(0.75)	13(0.28)	0(0.00)	51(0.38)	24(1.15)	1(1.11)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)

	医業(官)	外語(官)	高工(官)	高農(官)	高商(官)	高船水(官)	専門(私)	美音(官)
人 (%)	4(0.23)	5(0.34)	10(0.12)	6(0.16)	22(0.27)	2(0.17)	1(0.2)	20(1.88)

文部省「学生生徒生活調査」昭和13年より作成。

体も「教養主義」には添わない芸術だった。大学教授時代に教養主義をすすめてきた河合栄治郎は、「学生に与う」(1940)の中で、音楽や美術などとは縁のない少年時代を過したことに触れ、「一つは奇妙なピュリタンめいた考えがあって、芸術は我々を墮落せしめると云うように思っていたらしい」という。そして、「文学は詩歌、戯曲、小説、何れも言語文字を媒介としている点で、美術、音楽と違い、いつでも我々の感興を満足することが出来るし、感興を継続にすることが出来る。此の点では稍学問と似る所がある。ダヴィンチにしるミケランジェロにしる、ワグナーでもベートーヴェンでも、其の全人格を芸術に浸透させているにしても、文学殊に小説では、作者は文字で以て自己を語ることが出来る。従って美術や音楽に於けるよりも、作家其の人に直接することが出来る。こう云う点では文学は芸術であるばかりでなく、又他面に於て人生観や社会観を語る哲学と云うことも出来る。偉大な作家は文学の中に全生命・全人格・全人生を貫徹させている。我々は其の中に美を感じると共に教えを受ける」(132~3頁)と書く。音楽は教養をすすめた河合栄治郎には理解できない文化であり、そこから直接人生を学ぶことは出来なかった。音楽は、1891年東京下町生まれの世代である河合には及ばない趣味であり、文学ほどその教養を享受することのできない芸術であった。

このように、音楽はスポーツにいそしむ集団とは別の集団において成立しており、教養主義からも外れたところで愛好されたトレンドィーな趣味であった。バンカラ主義にも教養主義にもなじめない学生で、かつ裕福な者が音楽を愛好しはじめ、その周辺部に、都市出身で両親が会社員や銀行員などの新しい職業を持ち、自宅から学校に通う、「バンカラ」でない学生が位置していたのである。そのような新中間層出身の学生が、流行歌やクラシック音楽などを含んださまざまな音楽を学校の中に持込んだと考えられる。そして、その愛好の仕方は記録に残っていないからこそ、個人的に消費された見えない趣味なのである。一部の熱心な愛好者を除いて、集団をつくるようなこともなく、ただ流れてくる音楽と手に入ったレコードを聴く、全く新しい趣味であったと考えられるのである。

4. おわりに

ここでは、バンカラ主義や教養主義だけではない昭和初期の学生文化について、音楽を手掛かりにその一端を明らかにしようと、『学生生徒生活調査』を用いて、スポーツは旧中間層出身の学生の間で、音楽や読書は新中間層出身の学生の間で、その間に映画や絵画への愛好が位置していたことを描いてみた。学生の出身階層の構成比の変化についてはこれまでも指摘されてきたが、それが学生の趣味の変化にも反映されており、音楽はその変化を如実に表す趣味だったのである。音楽は、教養主義のように人格の完成のための投資的な活動ではなく、またスポーツを通じたバンカラ的「男らしさ」や旧制高等学校生のアイデンティティーなどを誇示するための行為でもない、個人的な楽しみを目的とした消費的行動だった。音楽は、都市中間層出身のトレンドィーな若者が追い求めた趣味だったと考えられる。

昭和初期は、華やかな都市大衆文化が成立した時代だといわれる反面、同時期の学生文化については、それに背を向けたバンカラ文化の硬派な側面や哲学書を読みあさる学生像が強調されてきたように思う。本論では、バンカラ主義や教養主義が学生文化を支配しているとされていた中

にも新しい娯楽が学生の中に普及しており、それを享受する学生が一定数以上存在していたことに触れた。今回明らかになった、読書趣味が音楽趣味と似た傾向を持っていることや、映画趣味がどちらかというスポーツ趣味に近い関係にあったことなどを手掛かりに、これら娯楽趣味が教養主義等とどのような関係にあったか、また学生はどのようにこれらの文化を捉えていたのか、今後の課題として考えていこうと思う。

注

- 1) 文部省『民衆娯楽調査資料』第1・5・6集(昭和6・8・9)には、各地方の主な娯楽が挙げられているが、謡曲や民謡が挙げられており、「音楽」はほとんど見られない。「蓄音機」「ラジオ」が挙げられる場合は少々ある。
- 2) 旧制高等学校の学生文化研究は高橋(1992)、笈田(1975,1982)他、教養主義に関しては筒井(1995)他によってなされている。
- 3) 昭和初期のクラシック音楽愛好者については修士論文『クラシック音楽愛好者層の誕生』でくわしく述べたが、ここでは触れない。
- 4) 昭和初期の新交響楽団の定期演奏会の会費は年間で25円あるいは15円であった(『音楽年鑑』各年度広告による)。
- 5) 演奏会会場が設けられていたのは、東京・横浜・大阪・京都・神戸・名古屋・福岡・前橋・仙台・札幌である(『音楽年鑑』各年度)。しかし、京浜地区以外での演奏会の開催頻度は不明。
- 6) 天野1989,325頁の分類による。
- 7) 昭和14年大阪高等学校の演奏会のプログラムを整理すると以下のとおり。管弦楽3曲、マンドリン・オーケストラ6曲、合唱6曲、独奏11曲となり、これらが混ぜ合わされた順番で演奏されていたようである。独奏もヴァイオリンやピアノからハーモニカまで多種多様である(『旧制高等学校全書』第7巻558~560頁)。
- 8) 『文藝春秋』は専門学校では愛読雑誌第1位、大学では『中央公論』に続いて2位である(文部省『学生生徒生活調査』昭和13年)。
- 9) 野村胡堂は明治後期から活躍した音楽評論家でもあり、彼は放送やレコードが普及する以前からの音楽愛好者であった。彼はベートーヴェンの交響曲が全部聴けたら死んでもいい(野村胡堂1955、194~195頁)とさえ思い、「クライスラーが日本へ来た時、私は身体をこわしていたが、医者と喧嘩してまで帝劇へ聞きにゆき、とうとう一生の大患いをしてしまった」(野村胡堂1959/1981、188頁)。大正7年徳島のドイツ軍捕虜がベートーヴェンの第九を日本初演したと聞いた時、彼と仲間は聴けなかった悔しさにすすり泣いたほどであった(藤倉1995,139頁)。これに対し昭和初期の学生の音楽への態度はかなり冷めているといえるだろう。

参考文献

- 朝比奈隆『わが回想』中公新書1985
 天野郁夫『近代日本高等教育研究』玉川大学出版部1989
 伊藤彰浩「高等教育機会拡充と新中間層形成」坂野他編『シリーズ日本近現代史3』岩波書店1993
 岡田節人『学問の周辺』佼成出版社1991
 笠羽映子「大正文学におけるオペラ・音楽の位相」『國文学』1990.2
 河合栄治郎「学生に与う」(1940)『河合栄治郎全集』第14巻 社会思想社1967
 小林秀雄「蓄音機」1958『モーツァルト』角川文庫1959
 倉田喜弘『日本レコード文化史』東書選書1992
 白崎秀雄『当世畸人伝』新潮社1987
 高橋左門『旧制高等学校の教育と学生』図書刊行会1992

- 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店1995
 笈田和義『旧制高等学校教育の成立』ミネルヴァ書房1975
 笈田和義『旧制高等学校教育の展開』ミネルヴァ書房1982
 中島健蔵『証言・現代音楽の歩み』講談社文庫1978
 野村胡堂『コーヒーの味』東方新書1955
 野村胡堂『胡堂百話』角川書店1959／中公文庫1981
 藤倉四郎『銭形平次の心』文藝春秋1995
 二見剛史「大学令と新大学制度」『日本近代教育百年史 第5巻』国立教育研究所1974
 南博他『昭和文文化』勁草書房1987
 Roden, School days in Imperial Japan, University of California Press, 1980.
 森敦監訳『友の憂いに吾は泣く』上下 講談社1983
 『旧制高等学校全書 第7巻 生活・教養編(2)』旧制高等学校資料保存会刊行部1984／1985
 『音楽年鑑』昭和7年度～12年度 音楽世界社1931～1936
 文部省『民衆娯楽調査資料』第一集「全国農村娯楽状況」 1930
 第五集「全国農山漁村娯楽状況(下)」 1933
 第六集「全国農山漁村娯楽状況(上)」 1934
 第八集「学生生徒の娯楽に関する調査」 1934
 文部省『学生生徒生活調査』上下 1938

Students' Love of Music in the Early Showa Period

Yoshiko KATO

This paper examines the love of music of students in the early Showa period, according to the survey conducted by Monbusho. Music became one of most popular hobbies of the students after student culture had become diversified from the late Meiji to the early Showa period. During that time, social composition of students had changed, and the cultural diversity was created because of the dormitory system was abolished and an increasing number of students came from the new middle-class. Among various students' hobbies, students coming from the old middle-class tended to love sports, rich students from the new middle-class in the city tended to love music and reading. And between these hobbies, movie and art were placed. And most of the students enjoyed hearing coming from disks and radio, although they did not listen to it so carefully. Consequently, music enjoyed by the new middle-class students in the city developed into a new hobby distinct from traditional student cultures.